

ドイツにおける学生の職業展望

お茶の水女子大学大学院 山本菜月

1 背景と目的

ドイツの若者が大学へと進む割合は戦後増加を辿るが3割程度であり、入学資格を獲得してからもすぐには進学しない者も多いなど高等教育に関する状況は日本と大きく異なっている(BMBF 2014)。しかし職業移行の面では、進学率の上昇に伴い「不適切就業」といった自身の学位や資格と異なる職業に就く可能性や、非正規雇用に甘んずるといった日本とも共通する不安定さも見られる。

高等教育修了者の職業への移行に関する実証的な研究が、ドイツでは近年まで少なく(ハインドルフ 2008)、教育や学生研究の分野では教育制度上の課題や傾向を取り上げるものが多く、個々の学生自身の意識に根差したもや彼らが持つ願望などについて触れられることはあまりなかった。そこで本報告では、ドイツの学生が自身の将来展望を語る中で、自身の専攻と将来の職業への興味や関心が何に根差しているのか、どのような職に就きたいのか明らかにすることを目的としている。

2 データと方法

2015年7月から8月に、ドイツ国内のノルトライン・ヴェストファーレン州の3大学を対象に協力者を募り、19-34歳の男女合計8人に対して半構造化インタビューを行なった。インタビュー実施時間は一人につき1時間程度である。自身の学校卒業後の職業だけでなく全般的な将来展望が語られた。本報告では主に、学生の専攻やその専攻に興味を持ったきっかけなどこれまでの状況に関するものと職業展望や職業に求めることなど将来に関するものについて取り上げる。

3 結果・結論

本報告での対象者は入学資格を得てすぐに進学した者や、自身の職業展望を考えてから入学する者など多様であった。一方で彼らには、大学に入学して研究を進めてからの進路変更が難しい、専攻・学習内容が就職にあたって強い関係性を持っているため、明確な展望を持つべきと考える姿勢が共通していた。また、他の統計調査などにも見られるように、職業のためにより高位の資格取得を目指して進学することを考えている者や、複数の学位取得に取り組んでいる最中の者もいた。入学を先延ばしにしたり、自身の興味に基づいて専攻を選択し学んだりする点は、日本の大学生の様相とは大きく異なっている。また、専攻を選ぶ際の学習分野への興味の持ち方も子どもの頃から志望を一貫させている様子が伺えた。学生の職業に関する展望で重要な点は、専攻に関連した職業に就くことを重視していることである。在学中から専攻関連のインターンやアルバイトに取り組んで有利に就職しようとする姿勢や、学問と職業の一致は自明であるという語りが得られた。

今回の対象者は市場に雇用を左右されやすい精神科学や人文科学専攻の学生が主で、必ずしも将来が確実ではない。将来の経済的な不安なども実際に学生から語られたが、彼らは高収入を目指しているのではなく、安定性や自分の学位と職業が合致しているかという点から語っており、大学生であることと学生が職業を得ることは学問を軸にした特徴のあることが示唆された。

文献

BMBF(2014): *Studiensituation und studentische Orientierungen 12. Studierendensurvey an Universitäten und Fachhochschulen*. [https://www.bmbf.de/pub/Studierendensurvey_Ausgabe_12_Langfassung.pdf] (2017年6月20日最終閲覧)

ハインドルフ、V.(2008)「ドイツ高等教育機関のキャリア支援プログラム—教育システムから雇用システムへの移行—」吉岡いずみ訳、『生涯学習・キャリア教育研究』第4号、63-81頁。